

## 大学院生の研究

### 博士後期課程 3 年次 小山田 真帆

古代ギリシア史を専攻しており、特に民主政期のアテナイを対象に、ジェンダー・セクシュアリティをテーマとする研究に取り組んでいます。昨年からイギリスで在外研究に従事する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年度および今年度中の渡英は断念することになりました。残念ではありますが、今は誰もが少なからず厳しい状況に置かれていることだろうと思いますので、国内で出来ることに取り組もうと努めています。

私は修士論文執筆時から、アテナイ市民という人々をいかなる集団として捉えるべきかという問いに対して、性規範という観点からのアプローチを試みています。昨年度は一般的に姦通 *adultery* と訳される「モイケイア」という性的行動を考察対象として研究を進めてきました。現在はその成果を整理すると同時に、博士後期課程 3 年目ということで、今までの考察のピースを博士論文という一つの研究としてどのように組み上げていくべきかと四苦八苦しているところです。

昨年度までの研究ではとりわけ女性の性的行動にフォーカスすることが多かったのですが、今後の研究では男性の性的行動にも目を向けるべきではないかと考え、現在は男性同性愛関係についての考察を進める準備をしています。1978 年に原著が刊行されたケネス・ドーヴァー『古代ギリシアの同性愛』や、その影響を強く受けたミシェル・フーコーの『性の歴史』第 2 巻に代表されるように、男性同性愛は古代ギリシアにおけるセクシュアリティ研究のなかで最も早く注目を集めたテーマの一つです。しかし、ドーヴァーやフーコーのテーゼが有名になるあまり、彼ら以降の議論があまり活発

にならず、その他の学説が提唱されても看過されているように感じられます。国内でもなかなかアップデートが進んでいないように思われますので、今後はフーコー以後の研究史をより詳細に辿り、機会があれば研究動向としてもまとめることができると考えています。

### 博士後期課程 3 年次 中辻 柚珠

近現代プラハにおけるナショナリズムの展開について、芸術家団体「マーネス造形芸術家協会」の言説を辿りながら調査しています。基本的な問題意識はこれまでの研究紹介と変わらないので、割愛したいと思います。大まかには、芸術家としての利害とナショナリズムの間の摩擦に関心があります。本来であれば今頃は戦間期の言説を対象に研究している予定だったのですが、進捗が悪く、いまだに前世紀転換期頃の史料と格闘しています。

昨年 9 月末より、カレル大学にて在外研究を行っています。新型コロナウイルスの影響で、残念ながら対面の授業はありません。今学期は「理論と実践における方法論」というゼミに参加しています。各学生が歴史学の／に適用可能な方法論に関する文献を一つ選び、それらについて全員で議論するゼミです。私は例によって Tara Zahra の“*Imagined Noncommunities*” (2010)を選びました。チェコ国内のチェコ史研究と英語圏でのチェコ史研究は、私の知る限りあまり相互に引用され合っていません。Zahra へのチェコ国内からの評価をずっと知りたかったと思っていましたので、良い機会に恵まれました。また、「想像の非共同体」論に伴う史料の乏しさ・実践面の課題についても考えを深められたらいいなと思っています。ちなみに、私のチェコ語での会話

力は全く高くありません。家に引きこもるばかりの毎日ですが、インターネットの環境を最大限生かし、チェコ語話者の友人と通話したり、チェコ語の動画を視聴したりして、どうにか会話の練習をしているところです。少しでも実りある議論ができるよう頑張りたいと思います。そして体調を崩さず、無事予定している6月末に帰国したいと思います。

### 博士後期課程3年次 藤田 風花

中近世東地中海史、とくにキプロス史を専門にしています。正教とカトリック、キリスト教とイスラームという、二重の境界域に位置するキプロスにおいて、教会と信仰のあり方が、東地中海世界の政治的変動とどのように連動していたかに関心があります。昨年9月に、英国バーミンガムでの約1年間の在外研究を終え、帰国しました。

現在は、1439年にフィレンツェ公会議で宣言された東西教会合同が、キプロスでどのように受容されたのか、というテーマに取り組んでいます。具体的には、フィレンツェ公会議後にキプロスに派遣された合同派の改宗ギリシア人である、ドミニコ会士アンドレアス・クリュソベルゲスの活動に注目しています。

15世紀前半は、オスマン帝国の躍進を背景に、東西教会のあいだで教会合同の機運が高まった時期です。一般に、1439年のフィレンツェ公会議における東西教会合同宣言にいたるまでのプロセスは、ローマとコンスタンティノーブルの聖俗権力間の交渉を中心に語られてきました。そうした交渉ののちに宣言されたフィレンツェ合同は、宣言後まもなくして破綻したことがよく知られています。

しかしながら、この「破綻」後も、個別的な教会合同の実現に向けた試みが継続されていました。

すなわち、正教徒とカトリック信徒が併存する東地中海世界の各地において、フィレンツェ合同を実施することが目指されたのです。そのために教皇によって各地に派遣された、ドミニコ会士を中心とした合同派は、教皇を頂点とするカトリック教会のあり方とそれに適合する教会合同の理想を、いかにして正教とカトリックという信仰の境界域で実現しうるかについて、見きわめる必要に迫られました。クリュソベルゲスの活動を分析することをおして、大文字の教会合同と、東地中海世界におけるローカルな宗派併存の歴史を接続し、それらの相互作用について明らかにすることを目指しています。

### 博士後期課程3年次 吉田 瞳

中世後期ドイツ史を専攻しています。2020年7月末に1年間のドイツ留学を終え、南ドイツのエアランゲンから京都に戻って参りました。前号では、奨学金の目途が立っていないこと、新型コロナ・ウイルス流行のため、留学中にもかかわらず史料調査が困難であること、語学試験の受験すらままならないこと、などを記しました。本号でもその経過報告から始めます。

まず、奨学金については21年4月から最長2年分が確定しました。それを利用し、可能な限り、今年9月に再度渡独するつもりです。前回の留学では結局、十分な史料調査を行えず、語学スコアを取ろうにも受験すら出来ない、といった有様でした。日本にいようとドイツにいようと、自宅軟禁状態では実質「どこにいても同じ」ですが、「ドイツにいるからこそ出来る」こともありそうです。

研究の中身については、実は留学前後でテーマが大きく変わりました。修士課程では、中世後期ニュルンベルクの参事会お抱え楽師に注目し、中世都市における楽師/管楽器の社会的機能の検討を図

りましたが、現在のテーマは「中世後期ニュルンベルクにおける侮辱と名誉規範」です。史料に残りやすい音とは何か考えた結果「侮辱の声」に行きつき、しかし、声の研究として進めていくには現状ワンパターン不可避であるため、歴史犯罪研究の文脈に近づけたわけです。関心の方向性としてはむしろ学部1回生のころに戻っており、嬉しいような悲しいような気持ちがしていますが、とはいえ音/声の歴史学を諦めたわけではありません。裁判儀礼における声のプレゼンスや、侮辱行為のパフォーマンス性などを検討できれば、博論になるかは別として、考えたいことは考えるのではないかなあ、と思っています。なお、修論で行った歴史的サウンドスケープの検討は、史学系の雑誌ではないですが、そのうち査読付き論文誌に載る予定です。4月には初期新高ドイツ語研究会での成果物も刊行されます。お手に取っていただくと嬉しいです。

#### 博士後期課程1年次 石原 香

フランス革命期における感情の在り方を、南仏トゥールーズでの公教育の事例から研究しています。感情史は近年の歴史学において注目に値する分野であり、その影響力は革命史研究にも及んでいます。その研究動向では、フランス革命がフランス人の感情に変化をもたらしたと指摘されています。革命という激動の中で、人々は期待と熱狂、不安と緊張等の感情で入り乱れ、革命が急進化していきます。そして革命の指導者たちは、規範的感情の形成に取り組みはじめました。フランス市民に相応しい感情が、さまざまな場で求められるようになります。その実践の一つが公教育であり、祭典や集会、博物館、劇場等は、感情を発露させるための公教育の場として、革命指導者にとりわけ重視されました。

修士論文では、総裁政府期トゥールーズにおける国民祭典と感情の関係を考察しました。総裁政府は、公教育政策を特に重要視した政府であり、それは数種類の国民祭典が毎年開催されたことにも表れています。さらに、祭典はフランス全土で催されました。中でも、ミディ地方オート＝ガロンヌ県に位置するトゥールーズは、革命期には「ジャコバンの要塞」と称されるほど共和派多数の都市でした。ゆえに同市の行政官たちは、共和主義に相応しい感情を見出すために、積極的に国民祭典を主催したのです。以上の歴史的背景をもとに、祭典報告書等の一次史料を分析する中で、トゥールーズの国民祭典には、法への忠誠心や自由勝利への歓喜、王政・アナーキーに対する憎悪・復讐心、地元への愛着心、熱狂、名誉心が表れていたことが明らかになりました。

現在は修士論文での成果を踏まえ、祭典以外の公教育に注目しています。特に劇場内の演劇は、感情のパフォーマンスを考察するうえで欠かせない要素だと考えています。革命期トゥールーズでの演劇からいかなる考察が可能か、期待を膨らませています。

#### 博士後期課程1年次 大野 普希

ギリシアがローマ支配下に入って久しい紀元後2世紀、ローマ帝国全体で「第2次ソフィスト運動」と呼ばれる文化潮流が隆盛します。ギリシア古典期の文体を模倣し、その歴史について創作を交えつつ語ることが、残された作品群から知られるこの時代の「流行り」でした。このようにして、理想化された過去が文化的営為の中心的主題となったことは、長らくギリシア衰退の徴表と見做されてきました。政治的自由を失った帝政期のギリシア人は、過去の栄光の中に被支配という現実からの逃避先を見出したというわけです。

しかし、「第2次ソフィスト運動」についての研究が進展してくるなかで、徐々にこうした単純な理解では済まされない側面が指摘されるようになってきました。そもそも、ギリシアの過去に関心を抱くことは、ギリシア人のみならずローマ帝国のエリート層が広く共有する傾向でした。ゆえに、諸都市は自らの起源の古さを主張することによって帝国内での特権に与ることを期待しえた、つまりギリシアの歴史は、帝国内のコミュニケーションの一手段として機能していたのです。それから一口にギリシアの過去と言っても、それを語る立場は実に多様でした。筆者が修士論文で取り上げたパウサニアスの『ギリシア案内記』は、この点で極めて重要な作品であって、その記述からは、都市や地域ごとに同一の歴史事象についての数限りない異伝が存在し、それが時にポリス間の対立の因ともなったことが知られます。

こうして、「第2次ソフィスト運動」の時代は、ギリシアの過去を語る様々な立場が競合し、それが現実のギリシア都市間の関係やギリシアとローマとの関係に直接的な影響を及ぼした時代であったと言えます。『ギリシア案内記』の分析を通して見えてきた、歴史の解釈の領域での都市間の対立に注目することによって、従来の衰退史観を越えた、この時代のギリシアについての新たな理解を提示することが今後の課題です。

### 博士後期課程1年次 岡本 幹生

古代ローマにおいて皇帝とは法的に定められた役職ではなかったため、アウグストゥスの政権はあくまでも彼個人の権威やカリスマ性に帰された支配体制に過ぎませんでした。そのため、アウグストゥス帝期においては彼がいかなる存在として人々にイメージされたのか、それ以後の時代においてはアウグストゥスがいかに記憶化していった

のかが、古代ローマの皇帝政治の政治文化を知る上で重要なテーマとなります。

昨年度提出した修士論文における研究では、上記の問題のうち前者を扱いました。アウグストゥスの政治体制は通説的には共和政の復興を目指したものとされています。そのため、アウグストゥスのイメージは独裁官であったカエサルの記憶とは相対するものと理解されてきました。しかし、この理解はアウグストゥスが内乱をカエサルの後継者として勝ち抜き、それが権力を掌握する契機となったという事実を矮小化しているように思われます。

そこで、私はアウグストゥスが共和政を復興したという歴史像を形成する根拠となっているウェレイウス・パテルクルスの『歴史』という史料を用い、アウグストゥスのイメージとカエサルの記憶の関係の捉え直しを図りました。それはアウグストゥスやカエサルに関連する事件史を追っていくのではなく、本史料中で両者がいかなる関係と想定された下で語られているかに注目したものです。すなわち、史料で言及される出来事を時間軸と水平方向に捉えるのではなく、ある時期に語られたアウグストゥスとカエサルの記憶の関係に関する1つの記憶として時間軸と垂直方向にあるものと捉え、検討したといえます。

さて、次なる課題は、カエサルの後継者として政界の階梯を上りつめたアウグストゥスが、いかにして皇帝政治の祖・原型として記憶されるに至ったのかという問題です。そこで、ウェレイウスの1世代後の人物セネカの著作を次なる研究の端緒として検討していきたいと考えています。

### 博士後期課程1年次 林 祐一郎

「怨恨も党派心もなく」(タキトゥス『年代記(上)——ティベリウス帝からネロ帝へ——』岩波文庫、

国原吉之助訳、1981年、14頁)。古代ローマの歴史家タキトゥスは、歴史家の規範をこう語りました。近代ドイツの知的巨人ヴェーバーも、学者の規範をこう語っています。「真の教員ならば、講義を聞く人に対して教壇の上から、あからさまにでも、ほのめかしによってでも、なんらかの立場を押しつけることを、とても用心深く避けるでしょう。なぜなら、『事実をして語らしめる』とすれば、もちろんこれは押しつけの仕方として最も不誠実なやり方だからです」(マックス・ウェーバー『仕事としての学問／仕事としての政治』講談社学術文庫、野口雅弘訳、2018年、60頁)。

しかし、規範が実際に遵守されるのかどうかは別問題です。かような高説を披露したタキトゥスやヴェーバーですら、自らの語った規範に忠実だったのかは怪しいと言われています。だとすれば、どうして彼らは規範から逸れてしまったのでしょうか。この問いは、歴史を書くという行為を例にすれば、こう言い換えることができます。「規範として事実に立脚した客観的な叙述を標榜しているのに、あるいは自分の叙述が絶対ではないと宣言しているのに、実態としては党派的・断定的な叙述になってしまうのは何故なのか」。

私が研究対象としている歴史家アンリ・トラン Henri Tollin (1833-1902) は、こうした問題を考える上で良い事例になるでしょう。「文書に基づく *urkundlich*」歴史研究を標榜した彼は、そもそも亡命ユグノーの末裔であり、カルヴァン派の神学者であり、プロイセン王国の愛国者でもありました。「偉大」な祖先たちの歴史に取り組んだ彼は、叙述の規範と実践にどう向き合い、読者たちからどのような反応を得たのでしょうか。この問いは、歴史学という人間の営為を自省的に捉え直す試みでもあります。

## 修士課程2年次 石田 和生

私は現在、中世後期のフィレンツェ、特に14世紀末からコジモ・デ・メディチが都市の実権を握りメディチ体制が成立する時代、すなわちフィレンツェ寡頭政期を取り上げ、この時代における人的紐帯を明らかにする研究を行っています。研究対象としては、昨年度に引き続き、寡頭政期における有力家門アルビッツィ家を取り上げています。アルビッツィ家は14世紀末に成立した寡頭政において大きな権勢を誇り、メディチ体制成立の時代にあってはメディチ家と激しく対立し、最終的には権力争いに敗北した家門です。

研究内容としては、アルビッツィ家が備えていた人的紐帯、現在は特に都市外の人物や勢力との紐帯に注目し、これを考察しています。寡頭政期以降のフィレンツェでは、都市における有力な家門が限定されていく中で、その有力者と繋がり恩恵を得るために従来の家と家の繋がりに拠らない個人的な友人関係が重視されるという傾向が見られました。私はこうした都市内において指摘される友人関係が、フィレンツェ人と都市外の存在の間にも指摘できるのではないかとこの前提の下に、研究を行っております。

具体的には、15世紀前葉においてアルビッツィ家の当主となるリナルド・デッリ・アルビッツィが遺した、彼自身が担当した外交任務に関する史料の集成を使用し、当時リミニを治めていたカルロ・マラテスタ、及び彼を中心とするマラテスタ一族との間に存在した人的紐帯を指摘し、その人的紐帯がどのように構築され維持されたか。またこの紐帯によってどのような効果が認められたかを考察しています。またこの研究を進めるために、当時の外交や使節に関する考察を進めると共に、外交書簡を紐解くため、当時のイタリア全体の政治情勢や勢力の対立軸の整理も行っています。

### 修士課程2年次 石濱 萌

私は現在、17世紀英国における身体異常の自己提示に関心を持って研究に取り組んでいます。古代より、奇形を持った人々は神の意志や予兆の意味合いを持たされ、予兆などを意味するラテン語からモンスター、怪物と呼ばれ注目を集めてきました。中近世ヨーロッパにおいては、社会道徳の乱れや異教に対する神罰等と関連付けられ、多くの出版物の中で戦争や革命における社会の乱れを示すものとして登場します。

そのような怪物と呼ばれた人々については、1980年代以降、怪物研究という形で多くの研究が行われてきました。しかしそれらの中では、近世における身体異常を持った人々の怪物視やその周辺の事象が扱われることが多く、当事者たちに光が当たることは稀です。そして何より、怪物は解釈されるものであり、戦争、宗教改革といった社会的な事象に関連付けられ、解釈されるものでしかないという認識が強く存在しています。近年は、障害について演劇作品での扱いや、ジョークブックでの描かれ方に注目することで、奇形や障害を持った人たち自体の生活や、社会との関わりを扱う研究も多く存在しますが、依然として当事者たちへの眼差しは少ないと言わざるを得ません。

私は、怪物と呼ばれた奇形を持った人々が、自身について考え、自己表現をした場として一つ、見世物の場を想定します。17世紀、彼らは大通りや十字路、縁日やパブのような場で、自分自身の身体を見世物として公開しており、イギリスにおいては広い階層に受け入れられた人気の娯楽の一つでした。知識層においては最早宗教的な解釈は無くなりつつある一方、大衆出版や日記には依然怪物という言葉が使われていた17世紀イギリスで、当事者たちが自分たちをどのように見せ、どのように宣伝したのかを調べることで、社会を映す鏡でな

い、社会に生きる当事者の姿を捉えることが出来るのではないかと考え研究を進めています。

### 修士課程2年次 藏戸 亮太

私はプトレマイオス朝エジプトを研究対象としています。アレクサンドロス以降の時代については、「ヘレニズム」概念を提唱したドロイゼン以来多くの議論がなされてきました。ヘレニズム時代はギリシア系の人々がオリエント地域を支配し、同地域でギリシア系住民の活動が拡大、その文化が社会的に重要となった時代でした。そのような状況下で、東西の民族の混交が生じたとされています。私は少数派の支配層であったギリシア系住民と、多数を占める現地住民との間の関わりに関心を持っています。

プトレマイオス朝エジプトにおいては、ギリシア系住民と現地住民の同化と分離の両方が主張されてきました。従来考えられていたギリシア人の「エジプト化」という見方に対し、1980年代には双方の人々の分離が強調する説が唱えられましたが、近年では再び両者の結びつきの重要性や同化が再認識され、地方での共存の様相や、ギリシア系住民に影響を与える現地民エリートの存在も指摘されています。

現在私は、プトレマイオス朝前期に地方で活動したギリシア人に注目しています。プトレマイオス朝においてギリシア文化は様々な面で優位な地位を獲得し、ギリシア的教養が社会的上昇の手段ともなりました。しかしその一方で、ギリシア人が社会的に重要性は低いはずのエジプト的な要素を取り入れるということも同時に起こっていました。時が経つにつれ個々人の出自が曖昧になり、出自より寧ろギリシア文化的素養が「ギリシア人である」ことを示すうえで重要になっていったにもかかわらず、です。プトレマイオス朝におけるギリシ

ア人のアイデンティティは、ヘレニズム時代の文化様相、そして人々が異文化と関わっていくあり方について考える上で非常に興味深いものであると私は考えています。

### 修士課程 2 年次 中山 真由香

私の関心は、1867 年～1914 年にかけてハプスブルク帝国がその国家体制を変える中で、帝国内の人々、とりわけオーストリアにとっての「ハプスブルク帝国」認識はどのように変容したのかにあります。

ハプスブルク帝国については、かつて「諸民族の牢獄」として捉えられ、帝国崩壊後の新生諸国家は国民国家として「解放」されたと理解されてきました。しかし近年の研究では、むしろ帝国は帝国内の諸ネーションと対立関係ではなく相互依存関係にあったことが指摘され、帝国と国民国家の連続性も認識されています。

「ハプスブルク帝国」の記憶が、地域や集団ごとでその様相に差異はあるものの、帝国亡き後もぬぐい切れない力を持っているという感覚は、私が学部時代の留学先であるウィーンで感じた思いでもありました。しかし、いかなる「ハプスブルク帝国」理解が影響力を持つに至ったのでしょうか。ハプスブルク帝国は、アウスグライヒ体制以降も国制変容を経験してきました。国制変容の最中で帝国理解に変化があるとすれば、後まで影響力をもつ帝国像とは何だったのでしょうか。

私は、アウスグライヒ体制下の帝国におけるオーストリア政府に注目します。国制変容に影響力を持つ共通政府組織に関与できるドイツ語話者エリートは、国制変容下でいかに「ハプスブルク帝国」を理解し、また人々に伝えようとしたのでしょうか。そしてその帝国像を学習した新たなエリートたちはどのような国制を模索したのでしょうか。

当時の帝国認識と国制変容のつながりを理解するため、特に体制変化を伴ったボスニアとの関係を注視しながら分析を行います。史料として学校教育のための地理学雑誌を中心にしながら、ボスニア地域との関係が揺れ動く時代に地理学教育を受けた将来のエリートが、ハプスブルク帝国の国制にいかに関与するかを見据え、オーストリア政府の地理学認識を通じた帝国理解の変遷とその影響を考察していきます。

### 修士課程 2 年次 新田 さな子

16 世紀イングランド、特にミッド・テューダーといわれるエドワード 6 世とメアリー 1 世時代の政治文化を研究しています。力不足の君主の下で問題が山積したと長らく否定的に捉えられた時代で、90 年代の再評価後もその傾向は根強いです。一方、優劣は置いておいて、テューダー朝君主ら自身の性質、政治、宗教の方針は実際各々で異なっていました。そのような王朝を、反乱や王位継承危機に直面しつつも王朝交代や内戦に陥らずに支えた政治文化に関心があり、急進的なプロテスタントからカトリックへの転換に伴い、政治中枢、聖職者、地方政府の人事、対外関係に変化が生じたミッド・テューダーは、通底する政治文化を探るには最適であると考えます。

修士論文で扱うエドワード治世 (1547～1553) は、1549 年に各地で同時勃発した反乱を遠因に政治中枢のあり方が変化し、崩御直前にはエドワード政権自ら王朝交代を画策、のちのメアリー 1 世との対立を招きました。このような変化と危機を経験したエドワード治世の政治中枢から地方までの政治主体がどのように作用し、反発しあい、しかし崩壊せず機能していたのか、ひとつのまとまりとして提示したいと思っています。

現在は留学中のヨーク大学に提出する MA 論文

に向けて、1549年の反乱の一つ、イーストアングリアで起こったケットの反乱を研究しています。イーストアングリアは王女メアリーの宮廷に加え、最有力貴族の所領があるなど王権に近い一方、中世から大陸交易で栄えた都市を複数内包していました。これまでの同地の反乱をめぐる研究は、他地域と比較すると経済的アプローチが多く、急進的なプロテスタント政策を進める王権に対してカトリックを固持するメアリーや都市政府の要職でのカトリックの存在を考慮すると、宗教的側面からの分析は必須であり、その方向で研究を進めています。京都大学の修士論文ではケーススタディーとして位置づけることができると思っています。

#### 修士課程2年次 米倉 美咲

毎年3月11日が近づくと、私は上手く呼吸が出来なくなります。それはちょうど留学先で、「我々にとって日本と言え、ヒロシマ・ナガサキ・フクシマだ。」と告げられた時の息苦しさに似ています。語らねばならない言葉が、考えなければならないことが、私には沢山あるはずなのに、否、それ故に、息が詰まって仕方なくなるのです。

私の専門は近世フランス史で、学部生の頃から一貫して、16世紀前半フランスにおける宗教改革を主に研究しています。具体的には、フランスで16世紀後半に勃発する宗教戦争の「カトリック対プロテスタント(ユグノー)」という構図が、いかにして生起し定着したのかを、ベルカン(Louis de Berquin)とルセル(G rard Roussel)という二人の人物の行跡と死とに焦点を当てて考察しています。彼らはカトリック教会から「(ルター派)異端」として断罪あるいは処刑されることになるのですが、注目すべきは、彼ら自身は終生カトリック教徒としての自覚を持ち続けていたということです。実際、彼らの著作を仔細に検討していくと、彼らの

主張をルター(派)やカルヴァン(派)のそれだと判じるのは困難です。したがって、カトリック教会が彼らを「(ルター派)異端」と断罪したのは、ある種の「レッテル張り」に基づいていたと言え、カトリック側のこのような判断が、16世紀フランスにおける「カトリック対プロテスタント」という大きな二項対立の創出に寄与していたと言えそうです。

十年前、放射線を浴びていると「思われる」人々への差別が起こっていたことや、そのように「思われる」地域の作物が風評被害に遭っていたことを、私は今でも、鮮明に想起してしまいます。勿論、現代日本の出来事を、500年前のフランスにそのまま対応させることは不適切でしょう。ですが、歴史的な出来事にせよ、現代的な問題にせよ、「レッテル張り」がもたらす衝撃と悲劇とを、私は息を凝らして見つめていたいと思うのです。

#### 修士課程1年次 小雲 立也

私は古代ローマ史、特に都市ローマにおける宗教や、ローマの人々の宗教的生活について深い興味を持っています。卒業論文では、ポメリウムと呼ばれる境界線を扱いました。ポメリウムとは都市ローマの周りを囲む境界線で、ローマを聖別し、市域における行動に宗教的な根拠を与える役割を持ちます。また、その境界内から軍事に関わる役職や神々、そして墓所を締め出す働きをします。

ポメリウムを扱う研究は、テオドール・モムゼン以来、法的な権限領域や政治的な役割を対象とし、ポメリウムという宗教的な境界線自体にはあまり目を向けられていませんでした。ポメリウムの考古学的史料が欠如していることや、文献における言及が少ないこともこの状況に拍車をかけることになっています。また、ポメリウムの記述の多くが起源と語源の話で、城壁とポメリウムの強いつな

がりが示唆されています。そのため、現在の研究者の間ではローマの7つの丘を含むセルウィヌスの城壁と同一視されています。この同一視はセルウィヌスの城壁とポメリウムとの不一致が存在するため、この二つの違いがなぜ起こってしまったかの問いを生み出しました。

私の卒業論文の目標は、ポメリウムに対するローマ人の認識を探ることでした。現在の研究者によるポメリウムの認識はローマ人達の認識と異なることが先の間を生み出したと考えました。特に、城壁との強いつながりを前提としたポメリウムの認識が誤りへと導いています。ポメリウムの役割と実態を捉え直すことで、ポメリウムという存在に対する新たな視座を生むことができると考えました。

現在は、都市ローマの中の宗教的な建造物に対して焦点を当てていきたいと考えています。特に、ウェスパシアヌス帝によって行われたポメリウムの拡大は、囲われた領域をおよそ二倍に増やし、都市ローマに大きな影響を与えたと考えています。都市という空間を研究し、そこで生きるローマの人々について考えていきたいと思っています。

### 修士課程1年次 川崎 紘子

私は中世イベリア半島におけるキリスト教とイスラームの関係に関心を持っています。イベリア半島では長くムスリムとキリスト教徒が近接して存在し、両者の間には戦争や支配だけでなく、同盟や通婚、通商など多様な関係を結んでいました。こうした状況下で、キリスト教徒がイスラームについてどう理解し、記述していたかに注目しています。

卒業論文では、9世紀から10世紀頃のキリスト教徒の手になるムハンマドの伝記を取り上げました。そこではイスラームの教義や歴史の一部を正

確に認識している一方で、ムハンマドが預言者であるというイスラームの教えを否定しています。その背景には、イベリア半島のキリスト教徒はムスリムと接触する機会が多く、またそれゆえに改宗や文化的融合への危機感を持っていたことがあると考えました。

これらの伝記が扱うキリスト教徒のイスラームに対する論難は、最初にイスラームの侵攻に直面した7-8世紀の地中海の東方地域や、12世紀頃のイベリア半島以外の西ヨーロッパにも共通して見られます。例えばムハンマドの結婚、イスラームの結婚にまつわる規定は批判の対象としてしばしば取り上げられています。これらの記述が相互に与えた影響を検証する必要があります。

またそうした批判の中には規範や慣習の違いから生まれたと見られる解釈、誤解もあります。イスラームの規範や慣習を併せて考えることで、キリスト教徒の理解を推し量ることができるかもしれません。

ヨーロッパとイスラームの関係に興味を持ったきっかけは、高校生の時に、中東や北アフリカからの移民・難民に関わってヨーロッパ各地で軋轢が生じているというニュースに触れたことでした。異なる文化を背負った人々とどう向き合うかは、現代にも共通の課題であると言えるでしょう。

### 修士課程1年次 白石 竜太

私はハンザ史の研究をしています。ハンザとは、北海・バルト海商業圏で活躍したドイツ商人たちによる都市連合です。最盛期には約200もの都市に関わり、12世紀から17世紀に至る約500年もの間、中世ヨーロッパ世界に存在し続けました。周知のとおり、日本では一般に「ハンザ同盟」として歴史の教科書には登場します。しかし、「同盟」という表現は必ずしもその実態を捉

えてはいない、というのが主なハンザ史研究の見解です。ハンザは「同盟」、「ギルド」、あるいは「会社」、または「共同体」、さらには「国家」とさえも呼ばれるような多様な側面を有する不可思議な都市の連帯だったのです。

知れば知るほど、ユニークとも呼べるハンザの連帯に私は惹かれました。ハンザとはどのような連帯だったのでしょうか。卒業論文では、15世紀にハンザ内部で現れる軍事同盟トホペザーテに注目しました。トホペザーテでは、有事の際、あらかじめ取り決められた兵数を各都市が派遣することが義務づけられました。つまり、商人のための経済的連帯であったハンザに、政治的・軍事的な連帯を志す動きが見られるのです。トホペザーテは目立った成果を挙げるのがなかったために、ハンザ史研究ではそれほど注目されてきていませんでした。しかしながら、ハンザの連帯の実態を考察する上で、トホペザーテの影響を考えることは有意義なものと考えます。

トホペザーテに参加する都市の変遷及び拡大をハンザ総会の議事録から追いつつ、ハンザの盟主リューベックの市民闘争やハンザを取り巻く対外的脅威など、ハンザ内外の動向とトホペザーテの形成過程の関連を探りました。そしてトホペザーテによってハンザとしてのアイデンティティが醸成されていった可能性を指摘しました。「ハンザのアイデンティティ」というのは、私にとって今後の考察の鍵となる要素だと考えています。ハンザとして商業的特権を得ている以上、ハンザとしてのアイデンティティはあってしかるべきです。しかし一方で、ハンザとしての連帯は非常に曖昧かつ局所的で、諸都市にハンザへの帰属意識があったのか疑わしくも思えます。ハンザのアイデンティティに光を当てることで、ハンザの連帯がどのようなものであったのか、考える糸口になるのではないかと考えています。

## エディンバラ大学博士課程 酒嶋 恭平

今年の3月で長らく休学していた京都大学を退学し、エディンバラ大学博士課程に一本化することにいたしました。ヘレニズム時代を中心としたペルシア戦争の受容史をテーマとした博論の執筆に勤しむ毎日を送っています。研究の関連上、最近ではディオドロス・シクロスやエポロス、テオポンポスといったヘレニズム・ローマ時代の歴史家や歴史叙述にも興味を持つようになり、現在の研究テーマとどうにかして接続できないかと日々模索しています。

ヘレニズム時代の歴史叙述といえば、読者の感情を煽るような悲劇的な叙述形式が発達すると同時に、それを忌避する傾向も登場したことで知られています。ここでいう悲劇的な形式とは、たとえば都市陥落後に市内にいた人々が受けた被害を詳述することなどを指しているようなのですが、ポリュビオスやディオドロス・シクロスといった主要な著述家たちはこの語り口に批判的な態度を取っており、前者はそうした語りには、少なくとも経緯や状況の十全な説明が必要だと主張していますし、後者はそもそも歴史家たるもの煽情的な描写を避けるべきだと考えています。つまり、彼らのような歴史家たちにとって戦争被害の集合的経験は歴史書に描かれるべきものではなかったのですが、これは現代歴史学の潮流とは全く逆の思想であり、注目に値するでしょう。今現在、戦争の記憶について研究しているので、それとの関連で何か書けないかと考えています。

さて、この紹介文を執筆している時点で（4月14日）、イギリスのコロナウイルス感染状況は大きく改善しつつあります。旅行制限や飲食店封鎖などの措置がよほど効果があったのでしょうか。その甲斐あってかイングランドではすでにロック

ダウンの緩和が始まっています（スコットランドではもう少し先のことですが）。しかし、市民の方はかなり気が緩んでいるらしく、屋内外で集合可能な人数の規制を無視したり、スーパー等にマスクをせずに入店する人をちらほら見かけます。残念ながら、まだまだ気の抜けない日々が続くでしょう。エディンバラは春らしく快晴の続く季節になってきましたが、晴れ空のもと自由に動き回れる日々が早く戻ってくることを祈っています。

### 京都大学非常勤講師／全労済協会客員研究員 浮網 佳苗

現在、「近現代イギリスの生活協同組合と消費文化」というテーマで博士論文を執筆しています。生協は消費者の運動なので消費が問題になるのは今では当然のように思われます。しかし、労働運動史が全盛期の1960年代、70年代は生産の視点が重視されていたので、買い物が活動の中心となる生協は、極端な言い方をすれば、労働者による運動の脇役とみなされていました。しかし、1990年代頃から消費軽視への反省にともない、近代における消費の歴史が注目されるようになります。

今では、消費の影響は私たちの生活のあらゆる側面に大きく作用していることが認識されてきており、持続可能な社会の構築にむけて、一人一人の消費者の行動が重要になってくるといわれています。こうした現代社会の課題を意識して、私の研究では従来の消費史の流れをふまえながらも、より新たな視点、例えば、女性、若者、帝国といった切り口で生協の実践を明らかにすることで消費史を捉えなおすことを試みています。

生協店舗の顧客の大半は家事を担った女性たち（とくに主婦）でした。彼女たち女性組合員は消費者の立場から食の安全や品質に関心を持ち、適正な労働条件のもとで製造された商品意識して選

択するようになります。生協は消費の力によって社会問題改善を目指していたため、まさに消費の力を自覚し、責任ある消費行動の実践を支えていた女性組合員の存在は生協運動の拡大にとって重要だったのです。

生協はまた帝国との結びつきも強かったといえます。世界恐慌以降、自由貿易の国イギリスも保護貿易政策に移行し、帝国を軸とした自国経済圏の構築に力を注ぎます。生協は、政府の政策を消費の面から後押ししようと、国産・帝国産商品の仕入れと販売を積極的にすすめ、組合員に対し、これらの商品を購入するよう呼びかけました。国産・帝国産商品を購入しイギリス経済の立て直しに寄与することが責任ある消費行動とされたのです。

今日、フェアトレードや地産地消など倫理的消費と呼ばれる責任ある消費行動が推奨され、注目を集めていますが、この動きは決して新しいものではなく、近現代イギリスの消費者によってすでに実践されてきたことであり、過去の取り組みの積み重ねのうえにあることを改めて実感させてくれます。